
独身女の優雅な人生 改

プランタジア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

独身女の優雅な人生 改

【Nコード】

N8148Y

【作者名】

プランタジア

【あらすじ】

如月涼子^{きんづき りょうこ}28歳。順風満帆に独身生活エンジョイしてます。なにしろ仕事は楽しいし、男には困ってないし。別に恋してなかったって仕事か恋人！ぐらいは言えるほど、立派にキャリアウーマンやってるもの。……は？ちよつと待ってよ。あたしに婚約者？そんなの居たの？！知らないわよ。今すぐ返品して頂戴。……え？返品不可。嘘でしょ。あたし、あんたなんか要らないわよ。結婚したくない女と、そんな彼女と結婚したくて堪らない男との攻防戦。 *
更新、スローペースですが、がんばります！

△オンラインライトノベルの方にR18版を掲載中です。パクリではありません。18歳以上の方はぜひそちらの方もお楽しみくださいm
（――）m（ストーリー殆ど変わりません）

人生最大の失敗

カーテンの隙間から朝日が漏れ、清々しい朝の空気が充満する高級マンションのとある一室。

辺りを見回せばここは自分の部屋ではなく、数度来た事がある部屋で、出来れば一生来たくなかった場所であることがわかる。

さらりとしたシルクのシーツの感触。

ベットの下に乱雑に脱ぎ散らかされたスーツや下着類。あれは間違いない自分のモノだ。

そして、恐る恐る視線を隣に向ける。

……ああ、やっぱり。

憎たらしいほどに整った顔。

フランス人とのハーフで、日本人離れた甘いマスクのこの男は人生で関わりたくない男だった。

すやすやと気持ち良さそうに寝息を立てるこいつの顔を見ていると、次第にこれが現実だと受け止めざるおえなくなってくる。

……やっちゃったよ。

どうする？あたしどうするべき？！

額に手を当てて、真剣に悩んだ。

……そりゃ、人生28年も生きてたらこんな日もあるわよ？

初めての生娘じゃあるまいし、朝おきて裸で知らない男と寝てても驚かないくらいの経験はして来たけど……

「問題は、相手がこいつって事なのよね。」

気持ち良さそうに寝ている男を見て、思わず泣きたくなる。

そもそもなんでこんな事になったのか、昨日の記憶が曖昧でわからない。

正気の際は死んでもこんな事するとは思えないからきつと、酔ってたんだと思うけど。

……はあ、こいつも記憶なければ良いのに。

きつと、世の中の女性が羨むような状況なのだろうけれど今はこいつが憎たらしくしょうがない。頬でも抓ってやろうかしら。

思わず丁寧にネイルの施された指先を頬に伸ばしそうになるが……
……っ、危ない危ない。

起きてしまったらさらに厄介な事になる。

「……とりあえず、起きる前に姿を消そう。」

冷静になって、導き出された結論。

証拠隠滅。何もなかった事にしさえすれば問題ない。全てうまく行く。

自分にそう言い聞かせ、静かにベットから抜け出した。

それからの証拠隠滅には神経を使った。

なにせ、あまり時間をかければ奴が起きる。かといって、何か証拠を残せば後あと面倒な事になる。

これでもかというぐらい手早く作業を終えると、涼子は足早にそのマンションから立ち去った。

願わくは、何事も起きませんように。

西園寺貴明という男

あれはなかった事だと言いついて聞かせて素早く自宅に戻ることに6:30。今ならまだシャワーを浴びてスーツを着替え直す時間があると、そつと胸を撫で下ろした。

なにせ、今日はまだ木曜日。平日の普通に会社がある日だ。休むなんてありえないし、昨日と同じスーツを来て出社なんて死んでも嫌だ。ただでさえ、女性の多い職場だからそんな事したら直ぐに会社中に噂が流れる。今まで特定の男の影がなかった涼子だから尚の事だった。

さつと、シャワーを浴びて。バスタオルを巻いたまま寝室に備え付けられたクローゼットへと向かう。そこにはオーダーメイドの品の良いスーツが8着ほど。

だけど、今日はスーツを着る気分じゃないのよねえ。

ふと、そんな事を思い浮かべながら今日一日のスケジュールを思い浮かべる。

確か今日は特に正装を要する場はなかったはずだ。急な来客なら会社に常備してあるスーツで事足りるしな。

……うん。カジュアルな感じでいいや。

そうと決まれば今度は隣のクローゼットを勢い良く開ける。そこから今年のヘルメールの新作のスカートとブラウスジャケットなど、躊躇する事なく取り出して身につけた。最後に化粧を施せば完璧だ。キャリアウーマン如月涼子の完成だった。

「おはようございます。社長。」

「ええ、おはよう。」

「社長、そのスカート素敵ですね。今年の新作ですか？」

「ふふっ。そうよ。ありがとう。」

自宅のマンションから愛車を走らせる事15分。都内のオフィス群の中に立つ奇抜な外装の建物が、涼子が5年前に立ち上げた”ヘルメール”のビルだった。

ヘルメールは20代から40代まで幅広い年齢の女性に合わせた”最大限に魅力を引き出す服”をコンセプトに最近人気の洋服ブランドだ。

社員は全て涼子自身が審査して選んだ才能ある、信頼できる人材ばかり。仕事は順調。街でヘルメールブランドの服を着る女の子をみると心が弾む。涼子はこれが自分の天職だと確信して居た。

――コンコンッ。

「失礼します。」

そう言つて社長室に入つて来たのは秘書の小野寺。この会社では珍しく男の社員でありながら、年は涼子の5つ上。涼子自ら23の時に始めた会社だけあつて社員の年齢層が若い中、小野寺は年長組だ。ノンフレームの眼鏡をかけ、質の良いスーツを着こなして居る。柔

らかな雰囲気と気配りの出来る性格が秘書として優秀であり、信頼おける人物だった。

「おはようございます、社長。」

「おはよう、小野寺。」

「早速ですが、今日のスケジュールの確認にまいりました。午前中は溜まって居た社長に目を通していただきたい書類を片付けていただきます。午後は14:00より、第一会議室で今年の秋物についての新プロジェクトについて。その後、17:00よりラティエヌ社との合同企画について、担当のモノとの打ち合わせが入っております。」

何も見ずに暗唱して見せるのは流石小野寺。

涼子はにっこり微笑んだ。

「小野寺。あたしもたまにはデザイン描きたいのよね。」

元はと言えば涼子はデザインを描く側の人間だった。しかしここ何年かで大きく成長したヘルメールではあまり涼子が描くことはなくなり、久しぶりにパソコンに向かいデザインを描きあげたくなったのだ。

だが、いまの忙しい涼子にそんな余裕があるわけがない。

「……………無理です。」

「そこを何とか、ね？」

「社長の腕が確かなのは知って居ますが、そんな時間はありません。一時間やそこらの話ではらないんでしょう？」

「ええ、だいたい3日欲しいわね。」

「……………勘弁してください。ご自分の休暇の時にどうぞ。」

いつもは改まった口調の小野寺が崩れた口調になるのは楽しい。自分より年上の頼りになる男なのでどこか兄のように慕う部分があるのかもしれない。涼子は時折こうして小野寺を困らせてみたくなるのだ。

小野寺も、これは本気ではないとわかっているからこそ苦笑いしながら付き合ってくれる。

「……………でも、本当に描きあげたら会議に回してもらえるかしら。」

ふと、そんなことを考える。社長としての権力をつかえば造作もないが、そんな事をするのはデザイナーとしてのプライドに関わる。なにより長年の友人で、この会社の看板デザイナーの夕霧が黙っていないだろう。

「本気でしたら夕霧デザイナーに尋ねておきましょうか？」

ふふっ、こっちやって小野寺はすぐあたしを甘やかすんだから。本当に兄のようだと笑みを漏らす。

その小野寺の申し出に軽く手を振って否定の意を示した。もし言うのなら、デザイナーとして彼に直接言わなくてはならないだろう。

こんな和やかな朝の風景はいつもの事。

大好きな仕事に大好きな社員たち。自分は今充実しているとひしひしと感じるのだった。

そんな中、一本の電話がこの雰囲気を一掃する事となる。

プルルル、プルルル…

『…社長、アポなしで西園寺貴明様が受付にいらして居ますが、いかがいたしましょう。』

『……………』

……は？

受け付けだって？ならもうすでにこのビルに居るって事じゃない。

『あの……………社長？』

電話越しに受付の子の困惑した声が聞こえる。無理もない。相手は大手の百貨店などを全国に展開する企業の副社長だ。ヘルメールとしても、お世話になって居る。だが、しかし……………。

い、嫌よ…会いたくないわっっ!!

眉間に深くシワがよる。

経営者としては、西園寺グループの御曹司がきてるのだ。いくらアポなしと言えどもお通ししないわけにはいかない。が、あいつがそんな真面目な理由で来たとは思えない。

このまま電話を切っちゃおうかしら。思わずそう思った時。

『わかりました。社長室にお通しして下さい。』

「……！！！」

『ええ、わかりました。では。』

涼子は目の前の光景に目を疑う。

小野寺が無駄のない動きで受話器を代わり、奴がくる事を承諾してしまったのだ。

「社長。」

……っつ。

小野寺の目が語っている。何で直ぐに了承し無いのだ、と。

いやいや、私もわかってるわよ？仕事の話ならいくらあいつでも拒む事なんかしないけど。絶対仕事の話じゃないモノ。断言出来る。

だが小野寺にそんな事言え無い涼子は頭をかかえたまま、小野寺に2人分のコーヒーの指示を出した。

指示される前にうごいて居るのが小野寺なのだが、今は仕方がない。そんな事に頭がいかないほど、涼子は普通じゃないのだから。

西園寺貴明という男？

「突然の訪問申し訳ありません。お忙しい所でしたか？」

目の前でスラリとした長い脚を組んで上品に微笑む西園寺。

あれ？

なんでこの男がめの前にいるんだっけ？

おかしいでしょう。目の錯覚かしら。

ついつい現実逃避に走ってしまう。

が、しかし。そんな事出来る立場じゃない。

社長を務めるようになって習得した微笑みを携えながら、内心の動揺を悟られ無いよう。さっさとお帰り願えるように仕向けるしかない。

「いいえ、ちょうど今日の午前中はたいした仕事はありませんでしたので大丈夫です。西園寺様と仕事の話をするには礼儀を欠いた格好とはおもいますが、何分急なご来客でしたので。」

向こうはスーツを着込み、こっちはジャケットを羽織っているとはいえカジュアルすぎる格好だ。仕事の打ち合わせとしては失礼に値するだろう。

涼子は詫びると共に、暗に仕事の話しかする事はないと言っている。この頭の良い男ならその意味を読み取る事ぐらいできるだろう。しかし……

「いえいえ、こちらが今日に押しかけてしまったのが悪いのですからどうぞお気になさらず。それに久しぶりに見るそういう格好の涼子さんも素敵ですよ。」

「……っ、この男は……」

ゾワゾワっと、悪寒が体を巡った。

どうも半分フランス人のこいつは齒に浮くセリフも躊躇なく言うてのける。それでも似合ってしまうのだが、涼子はそういうセリフは体が受け付け無いのだ。

なんとか「恐れ入ります。」と笑顔で礼を述べる。

そんな涼子をみて、西園寺はふふっと笑みを深めると、

「それに、今日は仕事の話で来たのではないので安心して下さい。」

と切り出した。

「……ちっ。これだから我儘坊ちゃんは。」

嫌な流れになったと内心の舌打ちするが、声に出すのはグツと我慢する。

「仕事のお話でないならなんの話でしょう？失礼ですが、西園寺さんと仕事の話意外でお話するような事は一切ないと思うのですが。」

「（あんと話す事なんて無いのよ。早く帰って頂戴。）」

「もっと気楽に話してくれていいよ？何せ今はどちらかといえばプライベートの時間として来ているからね。」

「（婚約者だろ？君は。）」

「まあ、プライベートですか。それなら失礼ですが、また時を改めていただけます？今は就業中の時刻ですから。社長の私だけプライベートな時間を過ごすわけにはいきませんし。」

「（非常識なのよ、帰りなさい！！）」

「涼子さんは真面目でいらっしやる。でも、年上として忠告させていただけるなら息抜きも大事ですよ？」

「（そんなに必死になって追い返さなくてもいいだろう？）」

本音と建前が入り混じった会話にふふふっと、どちらともなく笑みが漏れる。

牽制のしあい。その場に居合わせた小野寺は思わず苦笑いでその場を眺めてしまう。

西園寺貴明という男？

「――あれからピリピリと言葉の掛け合い。そろそろ抵抗するのもしんどくなってきた。

…と、先にしかけてきたのは西園寺の方。

「ね、涼子。」

口の端をゆるりと持ち上げて甘い声を響かせる。

名前で呼ぶな。名前で。

思わず眉間にシワがよりそうになるが、グツと堪えた。

一体今日だけで何回目よこれ。

眉間の筋肉鍛えられるわねえ。ま、筋肉があるかどうかもわかんないけど。

「いやですわ。そんな急に呼び捨てで呼ばれるなんて。恥ずかしいじゃないですか。」

「いいじゃないか。婚約者だろ。君は。」

「……………」

「今日はね、君のご機嫌伺いと結婚式の話をしようかと思って。」

はあー。

これでもかっていうくらい盛大な溜め息をついて、小野寺に視線を向ける。

その意思を正確に読み取った彼は心得た様に頷いてから静かに退出した。

それを視界のはしで確認して、涼子は目の前の勘違い男に向かい直す。

さて、と…。

もう笑顔を貼り付けすぎて引きつりそうだった顔を自然体にもどす。つまり、無表情に。

「そのお話でしたら断った筈ですが。」

ふんつと、鼻で笑ってそう本心を切り出した。そっちがその気ならもう客扱いはするもんか。

「俺は君が欲しいんだよ、涼子。」

しかし西園寺はそんな事ではひるまない。

…ちっ。

「名前で呼ばないでちょうだい。そこまで親しくなっただつもりはないけど？」

「タベの事、忘れたのかい？俺の腕の中であれ程喘いでいたじゃないか。」

「……………っ、」

ほんとーにつ、やな奴！

たった一夜の気の迷いでグチグチ言っちゃって。

こうなる事がわかってたから後悔したのよ。

この男なら寝たのを理由にそのまま結婚を押し進める事だつてやりかねないし。

このままシラを押し通す事だつてできるけど、きっとそんな事をしてもこいつには無意味だとわかっている。

「あら、私昨日の事たいして記憶に残って無いんだけど。記憶に残らない程の事だったんじゃない？」

「良すぎて記憶を失うぐらいだったからね。それより僕は君との結婚の話を進めたいんだけど。」

「はっ。一度寝たくらいで男ぶらないでよね。そういう男なら、あんた意外にもいるのよ。」

「涼子は俺に嫉妬させたいの？もちろんその男たちとは切れてもらうよ。ああ、大丈夫。仕事は続けていいから。それが君との結婚の条件だったからね。」

ああ、言えばこう言う。

生憎だけどそんな言葉で恥らう程私は幼くないのよ。

そう思いキツと強気で睨みつけるが、西園寺は優雅に微笑むまま。きっと世の中のほとんどの女性が虜になる様な顔。

「……お願いだから私の事を放っておいてよ。いいじゃない。あなたなら他にも好きな相手選びたい放題でしょ？」

もう口で言い合つのも疲れてついそんな事を口走ってしまつ。

「わかってないね、涼子は。俺は君が良いんだ。君以外の女なんて要ら無い。」

「それが分からないって言ってるの！結婚したってたいしたメリツトないわよ？」

「俺は君が良い。君が欲しいんだよ。」

断固として譲ら無いその姿勢。一体何が奴をそこまで自分に執着させるのか分から無い。そろそろ本当に勘弁して欲しい。

「ーふう。言ったわよね？私と結婚したいなら、自力で私を落すぐらいして見せてよって。」

にっこり、微笑みながらそう言えば。

「わかってるよ。君は絶対に俺に惚れるよ。」

そう、断言した。

それはまるで出会った時の会話の様だ。と、涼子は思ったー！。

事の始まり*（前書き）

さて、そもそもなんで西園寺はこんなに涼子に執着する様になった
のでしょうか（*・`・`）？

涼子と西園寺、出会い編です。

事の始まり*

「……は？今なんておっしやいました？」

思わず問い直す。

それがこの男の最も嫌う行為だったとしても仕方あるまい。それだけ俺は動揺していたのだから。

案の定、目の前の男……俺の父親であり西園寺グループの現当主の彼は眉間にシワを寄せて心底不愉快そうな表情を浮かべる。

今日は珍しく父親であるこの人と夕食を共にする日だった。滅多に家に戻ら無いクセにいきなり夕食を一緒にすると言い出すから何事かと思えば……。

「二度も言わせるな。結婚しろ。相手は如月財閥のお嬢様だ。明後日の昼に昼食をかねて見合いという名の顔合わせをしろらう。」

「……俺は結婚する気などないのですが。」

「お前の意見は知らん。少しは西園寺の為に役にたて。」

吐き捨てる様に言い放つこの男。

何が悔しいって、別に結婚する事ぐらい我慢するさ。そんな事より、今まで西園寺の為に働いて来たのに、それを否定されている言葉がムカつくんだ。

相変わらず、嫌な男だな。

それに今時政略結婚なんて流行ら無いんだよ。

「……わかりました。」

とは言え、当主に逆らえ無いのが現状だ。
言われるがまま頷いた。

「お前の部屋に相手の資料を届けさせておいた。目を通しておけ。」
それだけ言うと、食事もそこに席を立つ父。恐らく、母の元にも行つたのだろう。そんな父親に吐き気がする。

母は元々体の弱いフランスの旧家のお嬢様だった。フランス出張した際に母にであった当時の父は一目で彼女に恋に落ち、西園寺グループの財と権力を駆使して無理やり母を困った。今もなお、誰の目にも触れさせ無い様屋敷の奥に困ったまま。息子の俺ですら、週に数度会う事しか許され無い。

儂げで、美しく心優しい母。

あんな男にあつたはばかりに、囚われ自由を失った。狂つたような愛しか持ち合わせてい無いあの男が恐ろしい。と、同時にそんな男の血が流れる俺に幸せな結婚なんて出来るのだろうかと思うと、これから結婚させられる相手が不憫ですらある。

「結婚……か。」

食欲が失せた。半分ほど残したまま、自室に下がる。デスクの上には宣言通り、数枚に渡って見合い相手の資料が置いてあったが…。

「見たくないな…。」

はあ。と、溜め息をつく。

――それから二日。

お見合いの日などあつという間であった。

「初めまして。私、如月涼子と申します。」

独創的な、それでいてこういう場でも十分に通用する様なドレスを身に纏い、淑やかに微笑む。

一言で言つて、凄く綺麗な女だった。

まあ、それでもブスよりは美人のほうが見栄えもいいし色々楽しいだろぐらいの気持ちだ。どんな相手でも結婚しなくちゃならないんだから見た目なんて人に見せられる程度に整っていれば構わない。

「初めまして、西園寺貴明と申します。素敵なお召し物ですね。貴女のお美しさを引き立てています。」

この手の女は褒められ慣れているだろう。こんな言葉適当に交わされると思つてた。

……が、しかし俺の言葉に彼女は予想外にも目を輝かせる。

「まあ、恐れ入りますわ。私デザイナー兼、あるブランドの会社の経営者をしていますの。これはその新作なんです。お褒め頂いて嬉しい限りです。」

そこで初めて彼女の本当の笑みを向けられた気がする。それも、その笑顔は美しさを褒められた事ではなく服を褒められた事だ。少女のようにキラキラとした笑顔を浮かべるんだな…と、漠然と思つた。熟された女の色気を纏っているクセに、こんなギャップが魅力的に彼女を引き立てる。

不思議な女…。

それが、第二印象。

それから嬉々として仕事の話をする彼女。だが、暫くして自分がお見合いに来ている事に気がついたのだらう。ハツとしたような気まぜい表情を浮かべる。

「申し訳ありません…。」
すまなそうに謝る彼女。

いつもの俺なら内心イライラしながら笑顔で取り繕っただらう。だが、なぜか。

この女にはそんな苛立ちは感じず、寧ろそんな彼女を見ていたいと思ってしまうんだ。

「…何だろっこの気持ち。
ふっふつと湧き上がるこれは一体…？」

「いえいえ、お仕事が充実されてるんですね。素敵ですよ。」

「いえ…そんな事。」

クククツ。面白い女。

この心の底で湧き上がるような高揚感。

「本当にこんな素敵な方に会えて嬉しい限りですよ。」

にっこり、万人受けする笑みを浮かべながら考える。この気持ちは何なのか。

……ああ、そうだ。

”欲しい”

これだ。この女を俺の側におきたい。

こんな感情が湧き上がるのなんていつぶりだろう。正直、物欲がない俺が何かを欲しいと思うのは久しくなかったと思う。

この気持ちに気がつくと、次にゆっくりと失礼にならない程度に彼女を観察する。

緩くパーマをかけ、綺麗に整ったショートの髪。透き通るような白い肌には思わず触りたくなるし、少しキツ目だが意思の強さを主張するような黒く大きい瞳にはずっと自分を写して欲しいとすら思う。スツと鼻筋の通った高目の鼻、色気の漂う赤い薄い唇。

……よくよく見れば、つくづく自分好みの容姿をしてるではないか。もう、楽しくて仕方がない。

この女が欲しい。

父もたまには良い事をしてくれる、と、思わず顔が緩みそうになるのをなんとかガマンした。

さて、どうやって結婚話を切り出そうか。失敗は許されない。脳内でその計算を始めた時だった。

「……………あの、西園寺さん。一つお話ししたい事があるんです。」

「……彼女から話だって？」

もう、自分じゃないみたいだ。嬉々としながら、なんですか？と先を促す。

すると、彼女は少々口ごもりながら……

「ごめんなさい。私、結婚するつもりは全くないんです。この話。なかった事にして下さい。」

……………は？

聞き間違いかとも思ったが、目の前で綺麗に頭を下げる彼女を見て

はそれもないだろう。
彼女は俺と結婚する気がないのだ。

一気に体温が下がる。

——ああ……多分今の俺の顔は無表情に違いない。笑顔を作る余裕すらないのだから、情けないが仕方がないだろう。

気がつけばどうすればこの女を手に入れるか必死に頭の中で考えている。最悪既成事実を作ってしまうかとすら考えるのだから、俺はやはり奴の息子らしい。

事の始まり？

「……その日は丁度、月に3回ほど実家に帰る日のうちの1回だった。
後に、帰らなければよかったと後悔する事になるがこの時はまだ知らない。」

「りょうちゃん。貴女、婚約者が出来たから。」

”結婚して頂戴ね？”

まるでお遣い行つて来て？と言われるかのように軽く頼まれてしまい、思わず頷きかけた。
「……」が、寸前の所で留まる。

「……え、結婚？誰が？」

「あらあら、貴女の事よ？
お父様がね、良い縁談を持って来てくださつて。なんでも、元々はお父様の妹の秋恵さんが現当主方と結婚を約束されてたらしいんですけど、それが向こう様の都合で実現されなかったのよ。それなら

お互い息子娘が生まれたら結婚させたいって事で前々からお話があったんだけど、どうやら実現された様でよかったわー……。」「

母のいつてる事はわかるけど、いまいち飲み込めない。

旧家出身の母のおっとり口調が余計に事を現実味から離れさせる。

あたしが…結婚？いやいや。無理でしょう。

そんな叔母さんの婚約話とか知らないし。

あたし、結婚する気ないし。

あたしは断る気満々だった。

最悪、当日になってドタキャンしても良い。

そもそもあたしは如月家とは関わらないと、パリに留学する時話したはずだ。如月家の財産は全て放棄するから、如月家の厄介事は持つてくるな、と……。

「でも、りょうちゃん。お父様も心配なのよ？確かに貴女一人でもやっっちゃう子だったけど、結婚しないで一生過ごすなんて不安なもの。」「

「いいのよ。あたしは仕事が充実してるんだから。」「

なんとかその婚約を破棄させようと抵抗を試みたが…。

「だめよ。せめてお会いするだけでもしてみなさいな。」

そんな事言っちゃって。

会ったら会ったで、” 試しにお付き合いしてみなさな。直ぐに結婚するわけでもないんですから” とか言って、じわじわと結婚に持って行くクセに……。

しかし、柔らかいながらも有無を言わせない口調で押し切られ、結局あたしはその二週間後、西園寺グループ御曹司との見合いとなつてしまったのだ。

どうせ面倒くさい坊ちゃん相手なのだから、適当に嫌な女のふりしてさっさと破談に持って行こうと目論んでいた当日。
母親の意見を無視して着物ではなく自社の新作を身に纏い、嫌味の
一つや二つ言ってやるうと構えていたのに……

「初めまして、西園寺貴明と申します。素敵なお召し物ですね。貴女のお美しさを引き立てています。」

予想外にも、人の良さそうな笑顔を浮かべて真っ先に服を褒めてくれる。

これが社交辞令くらいわかってる。

わかってるのよ？

わかってるんだけど…。

思わず喜んでるあたしが居るのよ、ね…。

——それから、暫く熱くなって仕事の話を始めちゃったんだけど
予想外に西園寺さんは笑顔で相槌をうつてくれるもんだから止める
に止められなくて。

断らなくちゃいけないのに中々その言葉がでることはなかった。

事の始まり？*

「理由を…聞いても構わないでしょうか。」

取り敢えず断られた理由を聞くべきだと、少し冷静になった俺は考えた。

威圧させない様、顔に笑顔を貼り付けてゆつくりと尋ねる。こんなに笑顔を作るのが難しいのは初めてかもしれない。

すると彼女は聞かれることを予想してなかったのか。少々口籠ったあと、静かに話し始めた。

「失礼な話ですが、初めからこの結婚のお話は断るつもりだったんです。私はまだ結婚する気もありませんし、仕事が今の生きがいです。家庭にはいるつもりは…。」

言いくそくに、それでも強い意志を思わせる目はまっすぐこちらに向けられていて、思わず心がざわつく。

「それでは…もし、僕が仕事を続けても構わないと言ったら？」

「…………つ。」

よしつ。手応えはあつたみたいだ。

予想外の申し出に明らかに狼狽える彼女。

元々籍だけ入れて、堤体を守れさえできれば構わない様な結婚だったんだ。

俺はこの女さえ手に入れば後はどうでもいい。

このチャンスを逃さぬよう畳み掛ける様に言葉を繋ぐ。

「まだ会って間もないですが、貴女がどれほど仕事に生きがいを感じているかはわかりました。それに、仕事の話をしている時の貴女は魅力的だ。そんな貴女から仕事を奪う気もありませんし、家の事は家政婦を雇うなりすれば良い話です。」

「西園寺さん…………。」

「どうぞでしょう。僕と結婚を前提にお付き合いしていただけませんか。」

何がなんでも如月涼子を手に入れたい俺の言葉に、彼女は考える様に口元に手を当て黙りこくってしまふ。

これでいい。

考えれば考えるほど、これは悪くない話なのだから。

好きな仕事は出来るし、西園寺家とのつながりも出来る。ナルシストではないが、自分の容姿がどれだけ女性受けするかもわかってるつもりだ。彼女に受け入れるメリットはあれど、断るメリットはないはず。

俺はこの時彼女が結婚を承諾すると確信していた。

――しばらくして。

表をあげた彼女の瞳には再び決意の色が宿っているのが見えた。

ああ、心を決めたのか。

もちろん、自分にとって良い返事だろうと疑わない俺は自然と笑顔になり、彼女の答えを待ち構えた。

しかし…

「そこまで言うただけで嬉しかったです。仕事を理解してください。それに仕事をしている私が魅力的だなんてでも……

「……ごめんなさい。結婚はできません。このお話はなかった事にしてください。」

深々と頭を下げる彼女の姿。これを見るのは二度目だ。

……何が、どうなってる？

言葉は耳に入ってくるのに、脳がそれをうまく処理してくれない。

幸せの絶頂から叩き落とされる感覚とはこういうものなのか。ふと、そんな事を思ってしまう。

湧き上がるような高揚感は今はずっかりなくなり、今は身体中冷え切って血が通っているのか怪しいぐらいだ。身体が上手く動かないと言ってもいいだろう。

もう笑顔を取り繕うこともなく、覚めた表情で彼女をながめる。すると顔を上げた彼女が一瞬驚いた顔をするが、あの目の強さだけは変わらずそこに残って居て、それがさらに俺の苛立ちを煽る。

ここでやっと理解出来た。

『彼女は手に入らないのだ。』と。

—————初めてだった。

初めて心の底から欲しいと思った物だったのに、ソレは俺の手を擦りもせずにより抜けて行く。

えも言えぬ脱帽感、怠慢感に襲われるようだった。

それでも俺は足掻く事を諦めきれず、みっともないと思いつつながらも、ただなお僅かな可能性を探し始めてしまうのだ。

「それは…心を決めた方でもいらっしやるんですか？」

(ああ、未練がましい……。)

「……っ、違います。そんな人は居ません。」

「なら、僕に至ら無い点でもありましたか？」

（こんな女、代わりなどいくらでもいるだろう。）

「そんなつ。西園寺さんは素敵な方です。私にはもったいない無いぐら
いの。」

この女を諦めさえすれば、楽なのに。
それが出来ない自分が滑稽だった。

そして、必死になって否定する彼女をみて、再び少しだけ冷静にな
ることが出来る。

どうやら自分は嫌われて居ないらしい。他に男が居たら面倒だった
がそれもないようだ。

それなら……欲しくてやまないのなら、もつやる事は一つしか無い
だろう。

「涼子さん。」

「は、はい。」

ふられたというのに笑顔の俺をおかしく思い、赤ら様に警戒する彼女。

だけど、警戒するには遅すぎたんだよ？

俺は君が欲しいんだ。

どんなてを使ってでも、ね。

——欲は深まるばかり。

もう、とどまる事を知らないように……。…。

事の始まり？*

「貴女には俺と結婚してもらいます。」

その俺の言葉に彼女は一瞬理解できなかったようで、啞然として俺をみつめる。

無理もない、彼女はつい今しがたまで『結婚の話はなかった事にする』という話の流れだと思っていたのだから。

でも、残念だけどそんなの俺が許さない。

「な、何を…。」

やっと、紡いだ言葉がそれ。

「言葉の通りです。貴女には俺と結婚してもらいます。俺は貴女が欲しくなりました。」

「……………っ、人をおもちやの様に言わないでください。」

「そんなつもりはありません。俺はおもちやで遊ぶ趣味なんてありませんから。ただ、貴女には結婚して頂く。無理やりにも。」

「そういう意味で言ってるんじゃないやありません。貴方：随分と自分勝手ね。それが素なの？」

「初対面の人間相手に全てさらけ出すほど俺は浅はかではないんでね。それより君こそ自分勝手じゃないか。これは個人の感情でうごく話じゃない。如月家、西園寺家との事もある。聞けば先代からの口約だし破る事は許されない。」

「……本当に勝手。あたしは如月家の厄介ごととはかかわらないって当主の父とは話をつけてあるわ。そんな政略結婚のコマにされる覚えはないわね。」

吐き捨てる様にいう彼女は先ほどとは打って変わり、しおらしさの欠片も無く、荒々しくて苛立っている様だった。
どこか俺に対する嫌悪感すら見え隠れする。

しかし、
どんな感情であろうと俺だけに向けられる物は嬉しいものだ、と思ってしまう俺はどこかおかしいのだろうか。
もちろん、それが正の感情であればそれに越した事はないが。

今のお互い曝け出した状態での会話も、取り繕う様なものなんかよりも遥かに清々しいモノだった。

やっぱり、この女は良い。
どうしても手に入れない。
結局全てがその感情に繋がってしまう。

「……じゃあ、結婚はいつにする？結婚式はささやかなモノで構わないんだが、お互いの家が家なだけにそれでは済まないだろうからね。調整は難しいが今年中にはあげたいね。」

「貴方、人の話聞く気ないの？あたしは結婚する気もましてや貴方を夫にする気も全くないのよ。」

「ははつ。涼子は頑固だね。でも俺の家も君の家もそれを認めないはずだよ。それは許されない。」

「あら、ご存知？当人の意志を無視して結婚なんて出来ないのよ。あたしは結婚届にサインする気はないんだけど。」

ふんつと、バカにするように笑う涼子。

ふむ。

俺の周りには従順な女ばかりいたから、こういう女も悪くないと思う。

もちろん、俺も女に良いように言われてばかりでは済まさないけど。

「そんなもの、偽造でもすれば済む話だろ。要は俺とは違う筆跡なら良いんだから。」

「……思いつきり犯罪じゃない。」

「それが出来るのが西園寺の家の力だよ。もちろん俺もそんな事したくないから君が素直にサインする事を願ってるけど。」

「馬鹿馬鹿しい……。貴方があたしにそこまで執着する理由がわからないわね。」

ふう。と、疲れたようにため息を付きながら髪をかき上げる涼子。その姿が妙に色っぽくてそそる。

やはり既成事実から入ってしまおうか、と、よからぬ考えまで頭の中を過ぎった。

—————それからしばらくは、会話が平行線をたどった。結婚したい俺と、結婚したくないと言い切る彼女。そして……

”まあ、なんにせよ……”

涼子は突然そう切り出す。

「親の権力に縋らなくちゃ結婚出来ないような男と結婚する気はないわ。あたしと結婚したいなら、自力で私を落すぐらいして見せて

よ。」

不敵な笑顔を浮かべ、挑発するような口調の彼女。恐らく、俺には絶対惚れないと自信があるのだろう。だが…。

「構わないよ。いつそ、俺に縋って結婚してくれって言わせて見せようか。」

ゆっくりと足を組み替えてからニヤリ、とこちらも笑顔を返す。

俺が本気を出して、惚れなかった女なんていない。確かに彼女は一筋縄では行かないだろうが、最後は必ず手に入れてやるよ。

そう、これはゲームだ。

欲しいものを手に入れる為の。

思わぬ出会い（前書き）

前半涼子、後半貴明でお送りいたします。

思わぬ出会い

あの日……

あの夜を共にした日から少しずつ変わっていつている関係を、あたしだけで無く会社中の人間が気がついていている事だろう。

――
――
……

「社長、本日の予定されていたスケジュールは全て終了いたしました。」

――PM・7:00

普段より少し早めな時刻でそう告げられて、あたしのテンションも少し上がる。

久しぶりに夕霧と一緒に飲もうかしら。

それとも、行きつけのバーにでも足を延ばすのも悪くないわね。

この後の予定を頭の中で思い浮かべ、微笑を携えながら「わかった

わ。」と小野寺に返事を返す。

「あの、社長……。」

「……………っ。」

いつもの小野寺らしくない、機嫌を伺う様な声に思わず幸せだった思考がストップする。

こういう時の小野寺の言葉は決まって涼子にとって都合の悪いものだった。

「まった。聞きたくないわ。」

「ですが……。」

聞きたくないったら。聞きたくないの！

そう言っつて奴を拒めればどんなにか。

しかしそんなの現実逃避にしかすぎないのもわかってる。

涼子は無意識に髪をかき上げ、深いため息をついた。これが苛立った時の彼女の癖なのだ。

それから無言のまま手を振っつて見せた。

これが肯定の合図だと心得ている小野寺は一礼して席を立つ。

小野寺だっつて社長が嫌がる事はしたくない。しかし相手が相手なだけに不本意だろっつがその旨を伝えなければならぬ。彼はどこか胸

がつつかえたまま、社長室を後にした。

「……と、それと入れ替わる様にしてドアのノック音が。」

「……………どうぞ。」

自分でも思ったよりも低い声がでた。

「……ガチャッ。」

「相変わらずだな、君は。」

「西園寺副社長こそ。」「ごう毎日毎日我が社へ顔をお出しになる必要ありませんよ。」

「ヘルメールに顔を出しているんじゃない無くて君に会いに来ているんだろ?」

さも当たり前だという様に微笑んで、備え付けられた来客用の中央

のソファ―に腰掛ける西園寺。涼子はその様子を社長用のデスクから冷めた目で見守る。

「こう毎日あたしなんかの為に時間を割かなくても結構です。」

「涼子の為だからこそ時間を割きたいとおもっんじゃないか。」

「副社長も暇なのね。」

「秘書が優秀だね。必ず定時で上げられる様必死に調節してくれている。もちろん俺もだけど。」

皮肉めいた言葉を投げかければ必ず甘い言葉でそれを打ち砕く。涼子はそれが悔しくてたまらない。

でも何より嫌なのは、そんな環境に慣れてしまった自分よつ。

ギリッと指先に力を込めて、腕組みしていた腕に指がめり込む。

あの日から毎日の様に会社あがり会社に会社の前で待ち伏せしてくる西園寺。

相手が西園寺グループの副会長なだけに邪険にも出来ず、こうして社長室までお通しする事が常になってしまった。

さすがの一般社員にもそれは驚異の事に見えたらしい。最近ではすっかり社長の婚約者の西園寺副社長と、この会社で認識されている。

まったくもって、涼子にとっては不愉快な事だ。

「あたし、正直言つて迷惑なのよ。」

「何が？」

わかっているクセに白を切るこの態度に益々涼子の苛立ちが募る。

「ーっ、いくらなんでも毎日勘弁してちょうだい。こっちにも予定があるの。」

「涼子に予定がある時は素直に顔だけ見て帰っているだろう？それに君はこうでもしなくちゃ俺と会おうとはしない。自宅に帰られたら合鍵でもない限り会えそうもないしそこまでしたら流石に許してもらえそうもないからね。」

「あたりまえでしょ!!！」

まさかそこまで考えていたなんて、怒りを通り越して呆れてものがない。

ふう、とため息をついて額に手を当てる。

まさかこのお坊ちゃんがここまでしつこいとは思わなかった。見合の時の言葉だつて、頑なに拒む涼子をみれば直ぐに諦めると思っていたのだ。なのに実際はコレだ、予想外にもほどがある。

そんな涼子の葛藤をしつつか、一人細く微笑む西園寺。まるで涼子が自分のペースに陥っているのが楽しくて仕方がないかのような表

情。

このままの関係を粘り良く続けるのも悪くないが、そろそろ進展させたいと思っているのも事実。その為には今日はおきの切り札を持って来たのだ。

ゆつたりと自然な動きでスーツの胸ポケットから取り出した一枚の封筒。しかし、涼子はそれに気がついて居ない。

「涼子、今日はあるプレゼントを持って来たんだけど。」

にこやかに微笑む西園寺をチラリと一瞥して

「あたし、ブランドの服もアクセサリーも花束も欲しくないわよ。」
そっけなく言った。

西園寺は苦笑いしながら「わかってるよ。」と、返す。

彼女がその辺の女と同じ様にブランドモノや花束なんかで機嫌が取ればどんなに楽だったか。

自社の製品に誇りを持っている涼子はその辺の若い子が好むブランドの服よりもヘルメルの服を好む。アクセサリーだって、自分が気に入ったモノしかつけない主義だし、花束なんて貰ってもうれしくない。

なら、どうするか？

答えはその”誇り”に訴えかけるのだ。

「ジェービット＝ルーファーって、知ってるだろ？」

「……ピクッ。」

涼子が微かに反応を示す。
体は正直だ。

ニンマリと、勝利を確信した男は先程取り出した封筒を涼子に近寄って手渡した。

「……………これは？」

疑い深く、慎重に受け取る涼子。

「ジェービット氏の経営するD・Aの20周年記念のパーティーの招待状だ。」

「……？！ウン……………」

思わず口元に手を当てた。
予想通り、涼子の瞳は子供の様にキラキラと輝き、うっとりとしながら封筒をながめている。

思った通りの反応で一安心だが、その原因を作ったのが他の男というのが気に入らない。

内心苛立つものの、ご機嫌な涼子らに水を刺さない様静かに次の彼女の反応を待った。

「ジェービットって、本当にあのジェービット？」

今だ信じられない様にそう呟いた涼子。

そんな彼女に西園寺は苦笑いしながら頷いて見せた。どうやら噂は本当の様だ。彼女は世界的デザイナーのジェービットを尊敬してやまない、と。

「今や世界の一大ブランドまで上り詰めたD・Aを45歳の若さで作った男だよ。」

「ウソ：でも彼はそういったパーティーには親しい間柄の人物しか呼ばないって聞くわ。」

「実はアメリカに留学していた頃彼に世話になったんだ。それ以来、ビジネスにおいてもプライベートにおいても仲良くしてもらってい

るんだよ。」

まさかその友好関係がこんな風に役に立つとは思わなかったけど。心の中でそう呟いて涼子を眺める。涼子は、そう…と呟いて封筒を眺めた後、ゆっくりとそれを西園寺に返して来た。

「羨ましい限りね。楽しんで来て。」

にっこり、そうやって微笑む涼子。

ああ…これは彼女のビジネスの時の顔だ。

作り笑いのそれも確かに美しいが、俺はさっきの様にキラキラとした可愛らしい笑顔が見たいのに。そもそも彼女は何か勘違いをしている。

俺は確かに”プレゼント”だと言ったはずだが？

「もちろん、君も行くんだよ。」

「え？でもあたしは……。」

「ジュービットに会いたいだろう？。」

「……………」

その言葉はどうやら彼女にとって魅力あふれるモノだったらしい。どんなに誘っても頑なに断り続ける涼子が、ゆっくりと頷いて見せ

ただだから。

「…………でも、ただとは言わないんでしょっつ？」

苦々しく俺を見つめる彼女。

「……ふっ。」

「その通り。」

さすが涼子、わかってくれて話が早い。

やっぱり、ね…と、ため息をついた涼子。

そうとわかっていてもジエービットの

魅力には逆らえないらしい。

諦めた様な表情で封筒を見つめる。

「俺も君を連れて行ってあげたいのは山々なんだが…。」

「パーティーは同伴者としていけて事ですよ。」

やはり、気がついていたか。

そんな俺に、チラリと視線を向けて。

「だって、そんな美味しい話、その辺に転がってるわけないじゃない？ただでさえ彼は親しい間柄の人物しか呼ばないって有名だもの。その中に入っていけるとすれば招待者の同伴者だけだわ。」

ふう。と息を吐いて苦笑いを浮かべるら彼女。そんな頭の回るところも彼女の魅力の一つだ。

思った以上に事がすんり進みそんな事に安堵して、「なら、俺の婚約者ってことでいいか？」と最終確認をする。

「……仕方ないわね。もう、会社でも噂になってるし。西園寺グループと如月財閥の息子と令嬢がお見合いしたって話はそっちの世界には筒抜けでしょうから。今更気にしてもしょうがないもの。」

「その日は俺の婚約者としてしっかり振舞ってくれよ？」

「もちろんよ。それぐらいは覚悟してる。」

だって、ジュービットに会えるんですもの。

そう呟いた涼子の言葉は聞かなかったことにしよう。
何より彼女が俺の婚約者として大勢の前に立つっていうことが重大だ。一回公の場にでてしまえば取り消すのは難しい。
涼子はそれを込みでもジエービットに会えることを優先したんだろ
うけど、このチャンスをみすみす逃すつもりはない。

「じゃあ、パーティーは2週間後だから。招待状は渡しておく。5
時に君のマンションの前でまっているよ。」

「わかったわ。」

素直に頷いた涼子。

それに気を良くした西園寺はゆっくりと彼女のそばに近寄り、自然
な手つきで吸い寄せられるように涼子の頬に手を触れる。
ふわり、と甘いそそられる香りがした。

…スベスベで気持ちいい肌だ。

手のひら全体で、その感触を確かめるように頬を撫でる。

全く動じ無い涼子は流石だろう。

慣れているのか、西園寺をそういう目で見て居無いか。

恐らく両方だな…。

しかし、静かに受け入れる彼女に西園寺は行動をエスカレートさせた。

彼女の頬の上を滑っていた指のたどり着いた先。真っ赤なそそるような唇をなぞる様に動かす。

すると、僅かだがピクリと反応を示した涼子。

下から見上げる様にして西園寺の愚行を見つめている彼女の表情は何処か色っぽく、西園寺の下半身を熱くさせた。

ヤバイな…。

だんだん収まりがきかなくなってきた身体。

親指をかけて微かに空いた唇から覗く紅い舌が艶かしい。思わず喉元が、ゴクリとなってしまうそうだ。

ああ…欲望のまま、この唇を味わいたい。

ここで唇を塞いで愛を呟けば一体涼子はどんな反応をするんだろう。流行る気持をだんだん抑えきれなくなるのがわかった。

しかし、それを見透かした涼子がクスリと妖艶な笑みを浮かべる。

「貴明さん。婚約者のフリは二週間後のはずよ？」

「……………」

「ふふっ。誘ってくれたお礼はこれでチャラにしてちょうだいね？」

そつと西園寺の指を白いホッソリとした涼子の手が押し退け、代わりに西園寺の頬に手を当て涼子が背伸びをする。

「……………」

ゆっくりと合わさった唇。
ただ、触れ合っただけ。

今時中学生でももっと進んでいるだろうとは思うのに、涼子の柔らかかなソレと甘いそる香りは西園寺の身体を熱くさせるのに十分だった。

妖艶な笑みを浮かべながらユックリと離れた涼子。

貴明さん？と首を傾げるのもワザとだろう。

くそっ……たちの悪い女だ。

「……コレだけ？」

苦し紛れにでた言葉。

初めての彼女からの口づけに予想以上に参っている状態なのだが、そんな事悟られたくない。

他の女ともっと深いキスだってそれ以上の事だって散々やって来た。それなのにこんなに身体が熱くなる事があつたか…？

改めて思い知らされる。

何としてでも彼女が欲しい、と。

「あら、知り合いの男性にするキスならそれで十分じゃない？」

「……、他の知り合いの男にもこんな事してるのか!？」

余裕しゃくしゃくの涼子の態度が気に入ら無い。

しかしここで感情を露わにしては自分の負けだとわかっているので、怒鳴りたい気持を無理やり落ち着かせた。

「……なら、二週間後のキスが楽しみだ。」

口の端を持ち上げてそう切り替えず。

「残念だけど、婚約者相手のキスなんて経験ないから期待に添えな
いかもよ?」

涼子も黙ってはいない。

「……事の顛末がわかるのは二週間後。
二人とも各々の思いをその日に馳せるのだった……」。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8148y/>

独身女の優雅な人生 改

2011年11月24日02時53分発行